

●セッション【1】

テーマ:歴史と組織

「総合電機企業の形成と解体:戦略と組織に関する理論の歴史的検討」

◎西村成弘 (関西大学教授)

谷口明文 (東北大学名誉教授・中央大学客員研究員)

宮田憲一 (明治大学准教授)

平本 厚 氏 (東北大学名誉教授)

金 容度 氏 (法政大学教授)

田中洋子 氏 (筑波大学教授)

上野恭裕 (関西大学教授)

◎セッション・リーダー

[概 要]

2022 年 10 月に開催された組織学会年次大会(武蔵大学)において「経営・組織論的研究における歴史的展開」(酒井健・井澤龍・坪山雄樹・長谷部弘道・宮田憲一)をテーマとしたセッションが組まれた。同セッションに大きな注目が集まったのは、経営学や組織論研究において歴史への関心が高まっていることを示すものではあるが、他方で経営学や組織論研究でどのように歴史が使えるか、歴史をコンテンポラリーな組織論にどのように収斂させていくか、組織論に回収していくかといった、いわば歴史をひとつの素材とする見方に立つものであった。もちろん歴史学は豊富な素材を組織論研究に提供することができる。しかし、歴史は素材であるだけでなく、歴史研究それ自体に組織論は援用されており、歴史研究からも積極的に組織論に関する理論を発信する可能性を持つ。歴史研究に用いられる理論(歴史的事実をみるレンズ)がよりクリアなものになれば、歴史研究もより実り豊かなものになる可能性がある。本セッションでは、日米の総合電機企業の歴史的展開に関する研究の中から組織論に対する新たな問題提起を試み、歴史研究それ自体の面白さをアピールする。報告は谷口明文編『総合電機企業の形成と解体―「戦略と組織」の神話,「選択と集中」の罫―』(有斐閣、2023 年)をベースとする。

[参加者へのメッセージ]

登壇者の多くが組織学会の非会員であることから、同じ組織を研究しているとはいえ、組織論研究と歴史研究はずいぶんと遠くを並走しているように思います。セッションでは、組織論研究者、歴史研究者双方の視点から歴史における「組織論的視点の浸透」を発見し、両者間で対話が始まることを期待しています。皆さま、ぜひご参加ください！